

シンポジウム

「近代日本の児童文学と歴史読み物——ヒーロー・ヒロインの受容史・社会史」

大阪府立中央図書館・2025年5月24日(土)、14:00~16:30

本シンポジウムは、近代日本における児童文学と歴史読み物の関係について、特に歴史上のヒーローやヒロインの描き方という観点から再考することを目的としている。^{おちあいなおぶみ いけべよしかた}落合直文・池辺義象による『^{にっぽんれきしどくほん}日本歴史読本』(1891-92年)や^{おおわだたけき}大和田建樹の『^{にっぽんれきしたん}日本歴史譚』(1896-99年)をはじめ、歴史上の人物を描いた伝記物は、黎明期の児童文学における主流のジャンルであり、当時の社会形成にも重要な役割を果たした。少年・少女雑誌や歴史双六、絵本などにも多くの歴史的人物が描かれ、明治・大正時代の子どもたちに歴史的な価値や理想像が伝えられていたこともよく知られている。しかし、^{かつおきんや}勝尾金弥氏による歴史叢書と伝記の研究以降、児童文学や文化研究における歴史読み物の位置づけは薄れてきており、再評価が必要とされている。こうした現状に照らして、本シンポジウムでは、特に以下のテーマと課題を重視することとしたい。

第一に、「富国強兵」や「良妻賢母」といったスローガンを超えて、少年・少女雑誌に描かれているヒーローとヒロイン、特に歴史上の人物に託された価値観や理想像について考察する。さらに、歴史読み物と古典文学の関係性に注目する。近代以前の偉人伝や列女伝が、どのように近代の児童文学に取り入れられ、どのように変容したのかを検討することは、当時の教育や社会的背景を理解する手がかりとなる。最後に、大人向けの歴史小説とは異なり、児童文学における歴史読み物や挿絵には、「子ども」向けだからこそ可能な表現や試みがなされていた。読み物がどのように子どもたちに向けて歴史を語り、教育的なメッセージを伝えていたのかを再評価することも重要である。

これらの視点に留意しながら、近代の児童文学と歴史読み物との関係をあらためて問い直し、これから取り組むべき課題を明確化することをめざす。

講演

近代日本の少年少女雑誌の歴史小説におけるヒーロー・ヒロイン
今田絵里香

近代日本の少年雑誌『日本少年』と少女雑誌『少女の友』の歴史小説・伝記小説を比較して、どのようにヒーロー・ヒロインが描かれているのかを明らかにする。そのことで読者の少年少女にどのようなジェンダー役割が期待されていたのかを解明する。近代学校教育は少年に「立身出世」、少女に「良妻賢母」というジェンダー役割を期待していたが、少年少女雑誌はそれらを後押しするものを描き出しつつ、それらと相容れないものも描き出そうとしていた。少年雑誌のヒーローは「末は博士か大臣かあるいは大將か」という言葉どおりに学者・政治家・軍人が多いが、少女雑誌のヒロインは時代ごとに大きく変化し、スター・芸術家が多い時代もあった。

報告

「新撰名媛双六」にみる女訓の受容 — 小町伝承を中心として — 榎原千鶴

本発表では、江戸時代以降、広く親しまれた遊び道具のひとつである絵双六に注目し、歴史読み物に登場する女性像の受容と、そこに託された教育的メッセージを考える。具体的には1909年(明治42)『女学世界』(博文館)新年号の付録「新撰名媛双六」を取り上げ、同誌掲載の「絵解」と、双六に描かれた16名の女性のうち、祇王、袈裟、小宰相局、静、小督局といった軍記物語に登場する女性、および弟橘媛、小野小町らを手がかりに、児童を含む女性一般に向けて示された教訓を検討する。

大正期児童雑誌の歴史物語と挿絵にみる「子どもらしい」「少女らしい」ヒーローやヒロイン アーフケ・ファン＝エーワイク

明治中期以降、多くの歴史上の人物の伝記が出版されるようになり、特に男性を描いたものは男の子の手本とされた。大正時代には幼年雑誌や少女雑誌が盛んになり、歴史上のヒーローやヒロインも読者層に合わせて脚色されるようになる。本発表では、源平・南北朝・戦国時代の人物を取り上げ、以下の三点に注目する。第一に、昔の人物の幼少期の描写。第二に、中流階級の子どものたちの「遊び」や「習い事」の取り込み方。第三に、子どもを主人公とした歴史物語における内面描写の試みである。こうした「子どもらしさ」や「少女らしさ」をまとった昔の英雄像が体現する思想について考察する。

討論 司会:鈴木彰

プロフィール

今田絵里香 成蹊大学文学部教授。専門分野はメディア史、ジェンダー研究、教育社会学。主な著書は『「少女」の社会史 新装版』(勁草書房、2022年)、『「少年」「少女」の誕生』(ミネルヴァ書房、2019年)。

榎原千鶴 元名古屋大学教授。専門分野は日本の中世から近代に至る女性教育史、日本中世文学。主な著書は『皇后になるということ 美子と明治と教育と』(2019年、三弥井書店)、『烈女伝 勇気をくれる明治の8人』(2014年、三弥井書店)、「「女子の悲哀に沈めるが如く」— 明治二十年代表女子教育にみる戦略としての中世文学」(『少女少年のポリティクス』2009年、青弓社)。

アーフケ・ファン＝エーワイク 日本学術振興会外国人特別研究員。専門分野は近世文学・文化史、近代児童文学、受容史・カルチュラルメモリー。主な著書は「Historical Memory, Warrior Identities and the Young Child in the Early Twentieth-Century Japanese Picture Magazine *Children's Illustrated Children's Literature in Education* (先行公開 2024.4)、「子どもの心に訴える国家的英雄の創造と変容 — 少年の秀吉を中心に」(『文化権力と日本の近代—伝説と正統性、その創造と統制・隠滅』文学通信、2023年)、「Premodern Warriors as Spirited Young Citizens: Iwaya Sazanami and the Semiosphere of Meiji Youth Literature」*Japan Forum* 35:3 (2023年)。

鈴木彰 立教大学教授。主な著書は日本中世文学、とくに軍記物語・説話等の受容史。主要業績:著書『平家物語の展開と中世社会』(単著、2006年、汲古書院)、論文「「明治期の子どものたちと源頼光の物語」(『歴史と民俗』25〈神奈川大学日本常民文化研究所〉、2009.2)、「明治期の児童・少年雑誌にみる中世軍記物語関連記事について——『日本之少年』を中心として——」(『明治大学人文科学研究所研究紀要』72 2013.3)。